



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

12

E・ブロンテ

嵐が丘 河野一郎訳
詩 安藤一郎訳

中央公論社

世界の文学 12

©1963

E・ブロンテ

訳者 河野一郎
安藤一郎

昭和38年9月12日初版発行
昭和44年3月20日23版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

嵐が丘

3

エリス・ベルとアクトン・ベルの略伝

401

第二版に付したC・ブロンテの序文

413

詩

421

解説

468

年譜

498

嵐

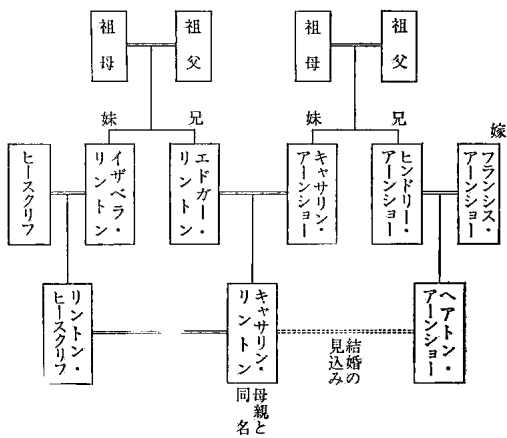
が

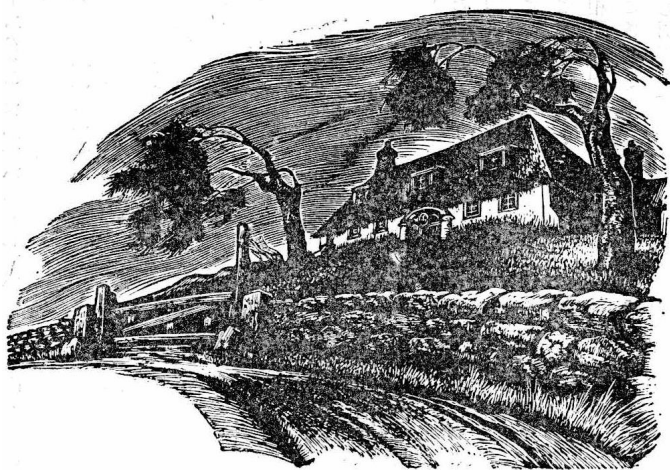
丘

〈アーンショー、リントン両家系図〉

リントン家
(スラッシュクロス屋敷)

アーンショー家
(嵐が丘)





第一章

一八〇一年——

たった今、家主を訪ねて帰ってきたところ——今後つき合いのありそうな隣人はあそこだけだ。まったく美しい土地もあったものだ！ イングランドじゅうどこを捜しても、これほど完全に騒がしい世間から隔離された場所は見つかるまい。つき合いぎらいの人間にとっては、まさに天国ともいうべきであろう——そしてヒースクリフ氏と僕とは、互いにその孤独を分かつには実に似合いの相手だ。すばらしい奴もいたものだ！ 僕が馬を乗りつけたとき、あの男の黒い目はひどくうさん臭そうに眉の奥へ引っこみ、さらにこちらが名を名乗るにおよんで、両手を用心深くいつそうチョッキの奥深くへ押しこんでしまった。それを見て僕のところがどれほど暖かい親近感に燃えたか、おそらく先方ではご存じあるまい。

「ヒースクリフさんでいらっしやいますか？」と僕は言った。

こっくり一つうなずいたのが答えだった。

「こんどお屋敷をお借りしたロックウッドです。実は、是が非でもスラッシュクロス屋敷を借りたいなどわがまを申しまして、ご迷惑でなかったかとおわびかたがたさっそく伺ったようなわけなんです。きのうちよつと耳にしたんですが、こちらでは何か別なお考えもあつたのか——」

「スラッシュクロスはわたしの屋敷ですからな」と相手は苦々しそくに僕の言葉をさえぎつた。「むざむざ迷惑をかけられて、黙つてたりはしませんよ——はいんなさい！」

その「はいんなさい」はろくに口も開かず吐き出され、「悪魔にでも食われるがいい」とでも言いたげな氣持がこめられていた。彼の寄りかかつていた門の扉さえ、いっこうにはいれという動きを見せない。どうやらそういう相手の出方が、どうしてもはいつてみたい氣持を僕に起こさせたようだった——こちらに輪をかけて人嫌いなこの男に惹かれたのだ。

僕に乗ってきた馬の胸がすでに門を押しあけようとしているのを見ると、さすがに相手も手を出して鍵をはずし、むつとしたような顔で先に立つて敷石道を案内して行つたが、中庭まできたところで、「ジョーゼフ、ロックウッドさんの馬をつれて行け。それからぶどう酒を持つてこい」とどなった。

（一人の男に二つの用を言いつけているところを見ると、どうやらこの家の召使は一人だけらしい。敷石の間に草が伸び、生垣の芽をそろえるのは牛にまかせてあるのも無理はない、と僕は思った。）

ジョーゼフは年配の——いや、まったくの老人だった。まだし、やんとしてはいたが、おそらく相当な年に違いない。「やれやれ、神様お助けくだせえ！」と僕の馬を引き取りながら、不機嫌そうにぶつぶつつぶやいた。つぶやきながらも渋い顔で僕のほうをじつと見つめている。

きつと昼めしがよくこなれるよう神の加護が必要なのであつて、やっかいな客がきたのをぼやいているのではあるまい、と僕は善意に解釈してやつた。

「嵐が丘」というのが、ヒースクリフ氏の屋敷の名だ。「ワザリング」とはこの地方に特有の言葉で、嵐になる

とこの高台がまともにさらされる、激しく吹きすさぶ風のことを意味していた。たしかにこの丘の上では、清らかな、身も引きしまるような風がいつでも絶えないに違いない——屋敷の端に生えているいじけた数本の樅の木が、ひどく傾いている様子を見ても、また太陽の恵みを乞うかのように、そろいもそろって同じ方向へ枝を延ばしている瘦せ細った茨を見て、丘の上に吹きつける北風の強さがわからうというものだ。さいわい建物は、心得た建築師によって頑丈に作られ、小さな窓が壁の奥深くにはめこまれ、その四隅は大きな突き出た石で護られていた。

敷居をまたぐ前に僕は立ちどまり、家の正面、特に大扉のあたりに一面に彫りつけられた異様な彫刻をつくづくと眺めた。くずれかかった怪物や裸の童子がむらがったずつと上のほうには、「一五〇〇年」という年号と「ヘアトン・アーンショー」という名前が読み取れた。できれば何か感想でも述べ、仏頂面のあるじからこの屋敷の歴史を手短かに訊き出したかったのだが、戸口に立った相手の態度は、さつさと中へはいるか、でなければとつとと帰ってくれと言わんばかりに見える。まだこの家の

奥殿を拝見しないうちに相手の機嫌をそこねたくはなかったので、結局それは思いとどまった。

一歩中へはいると、玄関の間も廊下もなく、いきなり家族部屋になっていた——この地方で「うち」と呼ばれている部屋である。ふつうは台所と客間がついているのだが、ここ「嵐が丘」では、台所はどこか別なところへ追いやられているようであった。少なくとも人の話し声や食器のふれ合う音が、ずっと奥のほうから聞こえてきたし、大きな暖炉のあたりには煮炊きの跡がなく、壁にも銅の鍋や錫の濾器は光っていなかった。もっとも部屋の一隅には大きな櫥の食器棚があり、銀の水差しや大杯などもまじえたたくさんの白鐵の皿が、天井まで幾段にも積み重ねられ、炉の光と熱をきらびやかに照り返していた。天井は板が張られずむき出しのままで、燕麦パンや牛の脚肉、羊肉、ハムなどを吊るした木枠に隠されている部分をのぞいて、骨組のすみずみまでが見渡せた。暖炉の上のほうにはさまざまの不気味な古い銃や、二挺の大型ピストルが掛けられ、また飾りのつもりであろう、けばけばしく塗りたてた茶罐が三つ並べてある。床はなめらかな白い石造りで、もたれの高い、古風な形

の緑色の椅子が置かれていた。どっしりした黒い椅子も一、二脚、暗がりに隠れている。食器棚の下の窪みには、大きな赤黒い雌のポインター犬が、くんくん鳴いている。たくさん仔犬に囲まれて寝そべり、ほかにまだ何匹かの犬が、それぞれ隅のほうに入りこんでいた。

部屋も飾りつけも、よく引きたつ半ズボンとゲートルにたくましい脚を包み、一徹な顔つきをした素朴な北国の農夫の家に见かけるものと何ら変りはない。そのような農夫が泡だつビールのジョッキを丸テーブルにのせ、肘掛椅子にくつろいでいる図であれば、食後のしかるべき頃合を見計らって訪ねて行けば、このあたりの丘陵地帯五、六マイルのどこにでも見られたであろう。だがヒースクリフ氏には、その住居や生活様式と奇妙に釣合わないところがあった。その風貌は浅黒いジプシーだが、身なりや態度は——いかにも田舎の地主様然とした——紳士であった。紳士にしてはいささかだらしなかったかもしれないが、姿勢のいい立派な身体つきのせい、その無頓着さもあまり目だたなかった。ともかく、ひどくむつとりした男なのだ。人によっては、品のない高慢な奴だという感じを受けたかもしれないが、心ひそかな共

感を覚えていた僕は違った印象を受けた。うちとけぬ彼の態度は、はでに感情をさらけだし、互いの好意をあからさまに見せ合うのを嫌う気持から出ていることを、僕は直覺的に感じとっていた。この男は愛も憎しみも自分の胸うちに秘め、愛され憎しみ返されることをいわば差し出がましいことと考えているらしい……いや、僕はひとり合点をしすぎたようだ。僕自身の性格をやたらと相手に当てはめてしまっている。押しつけがましく交際を求めてくる人間に出会って、ヒースクリフ氏が努めてよそよそしくふるまうのは、僕の場合とはまた全く違った理由からであろう。いずれ僕の性格のほうがおかしいに違いない——おまえにはしあわせな家庭は持てないだろう、と母からもつねづね言われていたが、ついこの夏、その言葉を実証してしまったばかりではないか……

好天氣に恵まれた一ヵ月ほどを海岸で過ごしている間に、僕はたまたま世にも美しい女性と知り合ったのだ。先方がまだこちらを氣にもとめなかった間は、その姿はこの世の女神もかくやとばかり映って見えた。口に出してこそ思ひは打ち明けなかったが、もし目が口ほどに物を言うものならば、僕がすっかりのぼせ上がっているこ

とは、どんな馬鹿にでもわかったであらう。やがてついに彼女にもこちらの気持が通じ、やさしい眼差を——この世のものとも思えぬやさしい眼差を返してくれた。ところが僕はどうしたか？ 恥をしのんで告白すれば——まるで蝸牛のように冷たく自分の殻に引っこみ、相手の眼差を浴びるごとにますます冷たく、ますます奥深く身をひそめてしまったのだ。かわいそうなのはうぶな相手の女性だった。とうとう自分の判断を疑わざるをえなくなり、とんでもない誤解にすっかりうろたえ、母親を説きつけて早々に引き揚げてしまった。このように氣まぐれな性分のおかげで、僕は故意に冷酷にふるまう男という評判を取ってしまったが、それがどんなに不当なものであるかは、自分だけがよく知っているつもりだ……。

僕はこの家の主人が歩み寄った暖炉の、ちょうど反対側の隅に腰をおろし、氣まずい沈黙をまぎらすため、親犬の頭をなでてやった。いつの間にか仔犬のそばを離れ、今にも飛びかかりそうに涎をためた白い歯をむき、狼のように僕の脚のうしろへ忍び寄っていたのだ。なでてやると、一声喉の奥から長いうなり声を上げた。

「その犬にはかまわんほうがいい」ヒースクリフ氏も負

けずにうなるように言い、それ以上凶暴な態度を示さぬよう、軽い足蹴を犬にくれた。「こいつは甘やかされつけてないんでね——おもちゃに飼ってあるのとは違うんだから」そう言って脇の戸口へ大股で歩み寄ると、また大声でどなった——「ジョーゼフ！」

ジョーゼフは穴倉の奥で何かぶつぶつ言っていたが、上がってくる気配は見せなかった。そこで主人のほうから下へおりて行き、僕は癡猛な雌犬と、これも雌犬同様の僕の挙動を油断なく監視している二匹の怖ろしい毛むくじゃらの羊用番犬と、さし向かいで残されてしまった。

犬どもの牙にかかるのはあまりありがたくなかったので、僕はじつとすわっていた。だが何せ相手は畜生のことだ、声に出さずにかからうぶんにはわかるまいと思い、三匹に向かつて目くばせしたりしかめつらをしてみせたりしたのがまずかった——しかめた顔つきのどれかがよほど氣にさわったとみえ、雌犬はいきなり激昂し、僕の膝に飛びついてきた。僕はそいつを突きのけ、急いでテーブルの向こう側へまわった。これがきっかけで、蜂の巣をつついたような騒ぎとなり、大小とりどりの四つ足の悪魔が六匹、それぞれの隠れ家から部屋の中のまん中へ飛び出

できた。特に狙われたのは踵と上衣の裾だった。火搔き棒を手に、襲いかかってくる大きな奴をうまくかわしたものの、とうとう大声をあげて家人の救援を求め、事態の收拾に駆けつけてもらわねばならなくなった。

ヒースクリフ氏と下僕は、じれったいほど落ち着いて穴倉の階段を上ってきた。暖炉のまわりでは吠えたり噛みついたりの大騒ぎだというのに、少しも急ぐ様子がない。さいわいにも、台所から急いで駆けつけてくれた人物があった。仕事着をたくし上げ、腕まくりをした大柄な女で、真赤に頬をほてらし、フライパンを振りかざしながら、騒ぎのまった中へ飛びこんでくれた。そしてその武器と舌とを巧みに操ったおかげで、嵐は魔法にかかったように静まり、ようやく主人がやってきたときには、ただ彼女ひとりが大風のあとの海のように胸を波打たせていた。

「何事ですね、これは？」と言って、僕のはうをじろりと見やったあるじの目つきは、ひどい虐待を受けたあとだけに我慢がならなかった。

「何事が聞いてあきれますよ！ 悪魔に取りつかれた豚の群れだって、お宅の犬よりはましですよ。いっそのこ

と、客を虎の群れにでも放りこんだらどうです！」

「手出しさえしなければ何もせんはずだが」と言って、あるじはぶどう酒の瓶を僕の前に置き、テーブルの位置を元に戻した。「見なれん客を警戒するのは、犬として当然ですからな。ぶどう酒でもいかがです？」

「いや、結構です」

「噛まれはしなかったんでしょう？」

「もし噛まれてりゃ、噛んだ奴に火搔き棒の烙印を押してやっただでしょうよ」

ヒースクリフ氏の表情がほぐれてにやりとした。

「まあまあ、ロックウッドさん、そう興奮せんでください。さあ、ぶどう酒でも。なにぶんにもめったに来客がないもんで、正直なところわたしも犬の奴らも、客人をどうもてなしていいかわからんですよ。では、健康を祝して！」

僕は一礼し、乾杯を返した。たかがやくざ犬どもに吠えつかれたからといって、いつまでもふくれているのもおとな気ない気がしてきたからだ。それにこれ以上、こちらが物笑いの種になって相手を喜ばせるのはまっぴらだった——どうやら先方はそういう気持になっているら



しかった。彼も——おそらくいい借家人を怒らせる愚
を悟ったのであろう——ぞんざいな口の利きようをいく
らか控え、僕にとって興味のありそうな話題を持ち出し、
今度僕が隠遁の場としてえらんだ屋敷の長所・短所の講
釈を始めた。彼はその話題については、なかなか見識あ
るところを示した。やがてまだ引き揚げもしないうちか
ら、僕は明日もう一度訪ねてこようと心に決めていた。
相手は明らかに、もう二度と来てはしくない様子だった。
だがかまうことはない、もう一度訪ねてきてやろう。こ
の男にくらべれば、僕はまだまだ社交好きに見えるから
驚くほかはない。

第二章

きのうは午後から霧がたち、冷えこんできた。わざわざ
ヒースの茂みとぬかるみを越え、嵐が丘まで出かけて
行くこともあるまいと思ひ、午後は書齋の火のそばでく
つろいでいるつもりでいた。ところが正餐を終え（とい
うのは、僕は十二時から一時までの間に正餐をとること
になっているのだ。この屋敷にくつついたような形で雇
い入れたおふくろ然とした家政婦が、正餐は五時にして
くれという僕の要求を、その気がないのかできないのか、
かなえてくれないのだ）——のんびりくつろぐつもりで
二階まで階段を上がり、書齋へ足を踏み入れてみると、
女中が小箒や石炭入れに囲まれて床にひざまずき、石炭
藪を山ほどかぶせて火を消し、もうもうたる埃をたてて
いる最中だった。この光景に僕はすぐさま退散した。帽
子をかぶり、四マイルの道のりを歩いて、やっとヒース

クリフ氏の庭不戸にたどりついたとき、待ちかねたように雪しぐれの最初の幾片^{おも}かがひらひらと舞い始めた。

この吹きさらしの丘の上では、大地は黒霜に固く凍てつき、冷たい風は身体^{からだ}じゅうをふるえ上がらせた。鎖がはずれないので僕は木戸を飛び越え、はびこったすぐりの茂みにふちどられた石畳の盛り土道を走り、玄関をたいた。誰も戸をあけてくれない。そのうち拳^{こぶし}は痛み、犬が吠え始めた。

「なんて連中だ！ こんな冷たい客あしらいをしてりや、世間からまるで相手にされないのも当然だ。少なくとも僕だったら、昼間から戸に門^{かど}をかけたらしらないがな。

かまうもんか——むりにでもはいってやるぞ！」そう腹をきめると、僕は掛け金を掴んで激しくゆさぶった。渋い顔をしたジョーゼフが納屋^{なや}の丸窓から首を出した。

「なんの用だかね？ だんななら羊小舎にいらっしやるだ。話があんなら、納屋のはじをまわってくがいいだ」
「うちの中には誰もあけてくれる人はいないのかい？」と僕は大声でどなり返した。

「若奥さましかおられねえ。おめえさんが晩までガチャガチャやったとこで、あけてくださる気づけえはねえっ

て」

「どうしてだい？ 僕の名を取りついでくれたらどうなんだい、ええ、ジョーゼフ？」

「やなことってすたい！ わしの知ったことでねえ」とつぶやいて首は引っこんでしまった。

雪は霏々^{ひひ}として降り始めた。僕はもう一度やってみようとドアの握りを掴んだ。そのとき、上衣も着ずに熊手をつかいた若い男が裏手の庭へ現われた。ついてこいという声に、洗濯場を抜け、石炭置場やポンプや鳩舎のあるたたきを通って行くと、やがて前の日通された大きな暖かい、居心地のよい部屋に出た。石炭や泥炭^{たき}や薪をいっしょにくべ赤々と燃える炉の光に、部屋じゅうが気持よく輝いている。そしてたっぷり用意された夕餉^ぐの食卓のそばに、それまで考えてもみなかった「若奥さま」なる人がすわっているのを見て嬉しい気がした。僕は会釈をし、おかけくださいとすめられるのを待っていた。だが彼女は、椅子にもたれじっとこちらを見つめたまま、口も利かず身動きもしない。

「ひどい天気ですね」と僕は言ってみた——「ところで奥さん、おたくの玄関の戸ですが、召使連中の怠慢^{たいまん}のお

かげでさんさんな目に会ってますよ。いくらたたいでも聞こえないんで、僕もずいぶん苦勞しました」

相手は口を開かない。僕はじつとその顔を見つめてやった——向こうも見つめ返す。ともかく相手は、冷ややかなよそよそしい視線を僕に向けたままなのだ。僕はとももいたたまれないような、不愉快な気持ちを覚えた。

「すわったらどうだね。今すぐくっから」と先ほどの若者がぞんざいな言い方をした。

僕は言われたとおり腰をかけ、咳ばらいを一つして、^{どうも}癡猛な雌犬のジューノーに声をかけると、さすがに二度目の対面のせい、僕を知っているというしるしに尻尾の先だけをちょっぴり振ってくれた。

「いい犬ですね！ 仔犬のほうはよそへお分けになるんですか、奥さん？」と僕はもう一度声をかけてみた。

「あたしの犬じゃございません」愛らしい女主人の返事は、あのヒースクリフでもこうまで冷たくはできないと思えるほど、木で鼻をくくったようなものだった。

「じゃ、あなたのお気に入りはこちらのほうでしたか？」僕は猫のようなものがいっぱい乗っている、暗がりの布団のほうを向きながら言葉をにつづけた。

「妙なお気に入りですこと！」さもさげすんだような返事だ。

まずいことに、それは死んだ兎の山だった。僕はもう一度咳ばらいをし、ひどい荒れ模様になってきたことを照れかくしにくり返しながら、暖炉のほうへ椅子を引き寄せた。

「出ておいでにならなきゃいいのよ」立ち上がり、炬棚から色塗りの茶罐を二つ取ろうとしながら彼女は言った。

それまで相手の位置は暗がりになっていたが、これで初めて全身と顔がはつきりと見えた。ほっそりとした女で、まだ娘々したところが抜けきっていない。これほど美しい姿、これほどかわいい顔を、僕はまだ見たことがない。抜けるように白い、小さくとのつた目鼻立ち。華奢なうなじにほつれなかった、亜麻色というよりも金色に近い巻き毛。そして、その表情さえ優しかったならば、ふるいつきたいほどの魅力をもっていたに違いない

つぶらな瞳——だが感じやすい僕の胸にとつてしあわせなことに、そこにはつきりと現われていたのは、およそ美しい目にそぐわぬ侮蔑と、一種の絶望との間をさまよっている感情であつた。茶の罐は彼女に届かなかつた。